



スケッチ『春を待つ信州』



大南 正瑛 画

執筆者紹介	群萌の建国 —日本国憲法の プラス改憲に向かって—	キツネの目 —勤務評定反対闘争の時 のこと—	年頭にあたつて
編集後記	児玉 晓洋	大木 映子	岩井 忠熊
		大江 真道	

年頭にあたつて

代表 岩井 忠熊

明けましておめでとうございます。

旧年にはさまざまの不快な出来事がつづきました。しかし世界でも日本でも、変化のきざしともいえる事態がすこしづつ見えてはじめたことも、注目すべきでしょう。

アメリカ合衆国の選挙では共和党が後退し、ブッシュ政権はイラク政策の手直しを迫られました。アメリカ国民はすこしづつイラク戦争のなりゆきに危機感をもちはじめたようです。しかし戦争というものは一たびはじまってしまうと、收拾も終結も簡単ではありません。これからアメリカは、見通しのつかない泥沼の中で苦悶することになるでしょう。合衆国国民の選択が、最後には平和へと向かうことを信じたいと思います。

昨年末の国会では自民・公明両党の強行採決で新教育基本法が成立しました。しかしその時に、公聴会のタウン・ミーティングで政府や教育委員会の各地でのヤラセが暴露されています。これでは新教育基本法が教育の世界で権威をもち、尊重されることが、むずかしいでしょう。連続する「いじめ」や子どもの自殺・虐待の防止に何の役にも立たないことが、だれの目にも明らかです。防衛庁が防衛省に昇格しても、一般国民生活にはほとんど直接の影響はありません。目にうつるのは大企業優遇の下での弱者へのしわよせです。知人の老婦人は電動ベッド取り上げで、寝たきりになりました。ここまで事態がハッキリすると人間だれでも目がさめるのが当然でしょう。今年は参議院選挙と一斉地方選挙の年です。有権者が民主運動史の経験に学んで頂けるよう、われわれの会も力をつくしたいと思います。

京都の民主運動史を語る会

平和を願う宗教者の想いと連帯

日本聖公会司祭 大江 真道

戦後といつても六二年めを迎えるようとしている現在、戦争の記憶は風化し、憲法を改悪しようとする与党勢力は、その手始めに教育基本法改悪を強行採決し、歴史から何一つ平和への教訓を学び取ろうとしない状況である。平和の問題を宗教者の視点から論じたい。

”ガズワ“（イスラム原理主義者の襲撃）の衝撃

一昨年三月に、東京品川Pホテルで「第19回国際宗教宗教学宗教学会議世界大会」が十日間開催された。日本の研究者が千人、外国からの研究者が七百人集まった。毎日、午前中は講演やシンポジウムで、参加者各自の発表は午後であった。その内容の発表要旨は前もって日英両語で報告書が印刷され参加者に配布された。会のテーマは「宗教—相克と平和」である。発表

のなかで興味をひいたのは、ドエイツのブレーメン大学のハンス・キッペンベルグ教授の「”ガズワ“に備えて 九・一一の襲撃」で、スピリチュアル・マニュアルが発見され、FBIによつて公表されたこの文書に対しても、疑惑が広がり、真相は確かめられない」という話からはじまり、ガズワ (ghazwa 襲撃) は三つの段階に区分されていて、襲撃前夜に、信仰で結ばれた同胞たちは「死を共にし、決意を新たにする忠誠の誓い」を立てた。夜間の朗誦と儀式と浄化が、若者たちを戦闘的英雄へと変えるのだ。空港での第二段階は、西洋文明によつて支配された世界において承認されざる戦士たちが必要とする、保護の問題に関する

卓越した力の実質的な証しとなる。最後に、機内での第三段階は、襲撃の実行者たちが殉教者となれるように祈り、彼らが犯す殺人を犠牲として意味づけるものである。似たような考え方では、若いムスリムたちが自らの命を犠牲にして襲撃を行つた八〇年代のレバノンの例からすでに知られている。イスラムの知識人たちによると、彼らは西洋文明を凌駕する力を証明するために、友人たちのなかにある西洋文明に対する恐怖を煽り立てた。九・一一との類似性は、信仰に燃える若者たちから成る複数の小単位という組織のあり方にも当てはまる。新たな邪悪な「ジャーヒリーヤー」によって支配された世界ないしは時代にあって、忠実な信徒だけが、眞の信仰者たちの共同体に加わり、イスラム的秩序の回復のために戦うことによって救済のチャンスを保持することができるのである。

造の批判的考察の必要性ということであつたと理解できた。イスラム学の権威である関西大学の小田淑子教授は、イスラムには異端審問（ヨーロッパ中世の歴史に典型的な）のような組織がなかつたし、ローマ教皇のような存在はないので、その主張の正邪を問う機関もなく、仏教でいう^註教相判釈（きょうそうはんじやく）といふこともないと言つておられる。九・一のガズワに加わつた者たちが、ワシントンや国會議事堂ではなく西洋的な資本主義の中心といえる世界貿易センタービルを攻撃したのは象徴的である。熱狂的でなく殉教精神と熱狂的な暴力とは紙一重の差だが、中身は隔絶している（^註教相判釈（きょうそうはんじやく））教えの説かれた形式、方法、順序、説かれた意味内容などによって、教説を分類して体系づけ、仏の真の意図を明らかにすることをいう。「総合 仏教大辞典」二六七頁 法藏館 二〇〇五年二月刊）。

この六〇年間どのように戦争を受け止めてきたのかについて、三冊の本をとりあげたい。「日本人の戦争観」の著者である吉田裕は「ダブルスタンダード」という言葉を使っている。それは、戦後の日本人がかつての戦争に関して、侵略戦争であったことは認めているが、東京裁判があつたので戦犯の有罪も是認してはいるが、アジアの諸国民に対する日本軍国主義の過ちについての認識はきわめて希薄であったと指摘している。連合国が日本を占領したというが実はアメリカの一方的な占領で圧倒的な軍事力のまえに原子爆弾を落とされて、戦争が終わつたというので、日中戦争への反省とか認識が希薄になつたと指摘する。蒋介石は戦後とても寛大な態度をとつたように、戦争の被害に対して中国はとても寛容だつたと著者の吉田も指摘している。吉田は明治以後の日本の対外的な膨張が侵略の歴史であると考える人が、N H K の世論調査でも五一・四%になつてゐると言う。このダブルスタンダードは、対内的と対外的な態度の落差、つまり、対外的な意

識が薄いことへの指摘である。東西冷戦のまえで、日本人は加害者としての意識をもつ機会を失ったという。一昨年一月に、京都の宗教者平和協議会で靖国神社へ調査にいったが、遊就館（ゆうしゅうかん）というフコク生命が寄付して作った展示館を見て、展示されている資料の説明に戦争に対する反省の文言が少しもないことに驚いた。

高橋哲哉の「靖国問題」（ちくま新書）の中に、戦争中の日本本の宗教はどうであつたかということの資料がでている。日本はかつての植民地のいたるところに神社を作り、台湾にもつくられ、シンガポールには昭南神宮、樺太にも朝鮮にも神社を造営していた。朝鮮では神社参拝をキリスト教の牧師に強要したが、殆どの牧師は拒否し、そのために迫害された。その当時、戦時中のプロテスタン卜・キリスト教の教会合同で、日本基督教団の議長・統理であった富田満牧師は、朝鮮へでかけていつて朝鮮の牧師の説得につとめている。また東本願寺の戦争協力のことも載っている。明治以降、政府は「神道は宗教にあらず」とい

う立場をとり、超宗教としての国家神道は天皇を中心として一神教のような「国家教」を国民に強要してきた。

大濱徹也の「日本人と戦争」や「庶民のみた日清・日露戦争」という本には明治政府が国という意識を人々にもたらせるための施策や、十年ごとに戦争をしてきた歴史を、日本近代の政治史を当時の庶民の手紙や手記から、つまり底辺から描き出している。日清戦争のとき、かつての農民たちが召集されて軍隊へ行つていろいろ異文化経験をする様相をみると、たとえば山形の田舎から徵兵された農民の兵士たちは、仙台について町の大きさに驚き、東京へいってさらにその大きさに驚いた手記を紹介している。兵士たちは日清戦争では、中国のような巨大な文明国との戦争におびえますが、その中国へいって町が汚いこと、貧富の差が大きいことで、優越感をもつようになつていったといふことなどを、大濱は多くの事例を克明に調べて、講演をしたり、書いたりしている。

伊藤博文は「憲法義解」で、「ヨーロッパではキリスト教が国民

をまとめていく役割を果たしてゐるが、日本にはそういうものがない」ことを述べ、「わが国教一たび隆盛の勢いを張りて上下の人心を繋ぎたるも、今日に至りてはすでに衰退に傾きたり、神道は祖宗の遺訓にもとづきこれを袒述すといへども、宗教として人心を帰向せしむるの力乏し、我国にありて機軸とすべきはひとり皇室あるのみ」とした。皇室への崇拜を軸にして十年ごとの戦争を通して、政府は一神教的な「国家教」を国民に押しつけたのである。神社参拝は昭和に入つてから強力に国民に強要されていった。上智大学での神社参拝拒否事件以降はキリスト教系の諸学校に押しつけられたのである。

時代錯誤の宗教観念—パラダイム変換以前・原理主義思考

キリスト教の福音派の信徒と話すると「私たちはアメリカの大統領が福音派の力で当選したこと、イラク戦争をひきおこしたことで困ります」という嘆きを聞く。福音派が悪い訳で

ではなく、このグループのなかの一部が、キリスト教の信仰の解釈にゆがみをもたらすような要素をかかえているからである。それは「ファンダメンタリズム」、つまり、聖書の言葉は一字一句神の言葉だから、いかなる時代に書かれたものであつたとしても、彼らの思考は歴史認識において、パラダイムの転換、変換をしていない。凝り固まつた聖書解釈では進化論も拒否する一種の熱狂主義である。宗教改革の時代でもまだ聖書解釈は保守的であった。過度に権力をもつたカトリック教会との戦いには聖書を武器にしましたが、プロテスタンント教徒のパラダイムは中世の続きであった。熱狂主義はファヌム(fanum・寺院・聖所)というラテン語からきていた。お宮、神殿、礼拝堂に排他的に閉じこもつて祈祷に凝つている人のことから、フランス語でファナチズム、英語でファナチズムという。古代教会への復帰でカトリック的信仰運動を指針したオックスフォード運動があつた英國教会の、ブロード派にはコールリッヂ(英文学者

で聖公会の司祭)のような、科学的認識と聖書研究の成果を積極的に評価した学者・聖職がいたことに留意したい。科学的認識とキリスト教理解とを調和させることでダーウィンを出した聖公会(英國教会)は、パラダイムの変換に敏感であった。第一不殺生戒の重み—インド仏教の終焉

九・一一事件のあつた年のクリスマスにKCC・京都キリスト教協議会では合同礼拝を企画した。礼拝の説教の準備の黙想をしているとき、啓示のようなひらめきを感じた。それは仏教の戒律の第一にある「不殺生戒」というのは凄いことではないか、ということである。一九九七年に「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催された京都の国際会館での発題のことです。キリスト教代表として、そのときの私に割り当てられた「意見発表部会」の「テーマ三グループ」の主題は「宗教者間の連帯と人類に果たすべき役割」であった。私は、聖フランシスの祈りの「私たちを平和の器にしてください」という言葉をテーマに選び、「平

和の器として」という発題をした。結論として、「宗教は他者の救いのために、人類の平和のために存在すべきものです。自分の宗教・宗派・教派がそのためになくなつたとしても、人類の平和のために役立つならば幸いであるとすべきです」と結んだ。

しかし、このことを歴史的事実として検証した研究を昨年知ったことは衝撃的だった。麗澤大学教授の保坂俊司は、「インド仏教はなぜ亡んだのか—イスラム史料からの考察—」(北樹出版二〇〇三・五初版、二〇〇四・五改訂版)という本を出している。保坂は、シク教の研究をしているときに「仏教徒がイスラム教に多数改宗した」という文献を調べ、「仏教徒と「マ」という史料入手して、そこから西インドに仏教徒が多くなことを知り、「仏教徒と思われる人々が、自らの宗教的戒律のゆえに戦いを拒み、進んでイスラム教徒の支配に降るという道を選んだ」という。保坂氏の著書を読み「不殺生戒」を守つたために仏教がなくなつたという歴史的事実には衝撃を受けた。

けずにはおられなかつた。平和への祈り—地球倫理宣言—個人の信仰が教団レヴェルになると、正義の戦争を承認してしまう。十字軍という負の歴史はその最たるものである。殉教するというのは、いつも個人であつて、教団は殉教しないことに気づくべきであろう。キリスト教史のパラダイム変換を主張するドイツのハンス・キュンク神父は第三回世界宗教会議で四つの「地球倫理宣言」を提唱した。1 殺してならない、2 嘘をついてはならない、3 盗んではならない、4 性的不道德をおかしてはならない。これは人々の自覚に訴えるもので法律によつて課せられるものではないのだが、個人的レヴェルだけでなく、諸機関に向けられるべきで、結果を伴うべきであるといつている。平和という言葉は挨拶の言葉として日常生活のなかで使われる。イスラム教徒の挨拶の「サラーム」もイスラエルの「シャローム」も、そして、ハングルの「アンニヨン・ハシムニカ」も平和を求める言葉である。平和を阻むものとし

て自分自身の、人間の心のなかに果食つてゐる悪魔的な要素と戦うことが大切である。「地球倫理宣言」のなかにある個人的な道徳の遵守は、そのまま公共的な道徳の遵守は、そのまま公共的な倫理の確立につながつてゐる。おたがいの相違をのりこえずの「多様性のなかの一一致」を実現することが「宗教(者)の願い」である。私たちが、「自

分を愛する(自分自身を厳しく検証し、在るべき自己)を追求)ように、「他者」「隣人を愛せよ」という主イエスの教えに忠実に生きることは、世界の平和につながることである。この願いを十全に実現された「聖フランシスの祈り」の言葉を胸に受けとめて生きていきたいと思つていい。

キツネの目 —勤務評定反対闘争の時のこと—

大木 映子

母に連れられて集会に参加し、円山音楽堂では「緑の山河」も憶えた。

めずらしく父があまり遅くなづ帰ってきた。しばらくして「てるこ」ちょっとおいで。」と呼ばれた。こういう時は大切な話である。父と母の前に正座をして話を聞いた。先生の子どもは明日(一九五八年九月十日、日教組統一行動の日)の午後早く退することになったが、どうす

る?といつるのである。

学校の先生の勤務評定をめぐつて、はげしい闘争が続いていた。ことは私もよく知つていた。

父、石田稔は、当時京都市教育員組合の委員長をしていた。私が寝てから帰宅し、朝早く出かけるという毎日であつたから、かけていた。二条城前集会では、トラックが演壇になつていて、壇上で司会をする人を見た時、「あつ、お父さんや。」と心の中

大きく頼もしかった。

私はためらうことなく

「帰つてくる！」

と答えた。

翌朝、学校に着くと、担任の先生に

「きょう、昼から帰ります。」

と告げた。先生は、そうかといふようにうなずいたが何も言わなかつた。

四時間の授業がすむと、親しい友人に

「勤務評定反対で、先生の子どもは昼から帰ることになつてい

るし、私帰るわ。」

と言つた。友人には意味がよく通じなかつたようだが、お父さんたちのしていることは正しい、

私はそれに協力しているんや、

と誇らしい気持であつた。

帰宅して二階で本を読んでい

ると、玄関があいて、人の来た

氣配がし、ほどなく帰つて行つた。

すると母が二階に上がつてき

た。少し心配そうな顔である。

「だれか来はつたん。」

「貞教校の校長先生や。つかつとかと入つて来て『貞教校で早退したんは石田さんとこだけや』て

私は隣の学級のM君を思ひう

かべた。お母さんが学校の先生をしていると聞いていたからだ。あの人は帰らへんかつたんやな。「そんなこと言うても、私、もう帰つてきてしもてるやん。」母がほつとした表情で

「そうやな。」

と言つた。二人でにつこり笑いあつた。

一月ほどが過ぎたある秋の午後、私は、風邪をひいて休んでいる高校生の次兄と一人で留守番をしていた。

表で人の声がするので出てみた。「お父さんかお母さん、おられますか。」「留守ですけど。」「何時ごろ帰られますか。」「母は夕方には帰ると思います。」「そうですか、じゃあ、また来ます。」

二人連れは強行に家の中に入つてしまつた。しばらく押し問答があり、彼らは二階へ上がるのはあきらめたが、一階の押し入れを開けて物色はじめた。

家宅捜査である。

「お父さんかお母さん、おられますか。」「留守ですけど。」「何時ごろ帰られますか。」「母は夕方には帰ると思います。」「そうですか、じゃあ、また来ます。」

そこへわが家と池田正太郎先生（当時、市教組副委員長）の家があぶないと聞いて、母が急

目つきの鋭い二人連れであつた。

ふだん父と話をしに来る人たちと違うものを感じたあまり気にもせず次兄とトランプをしたりしていた。

一時間ほどして、先ほどの二人連れがまた来た。外はまだ明るく、夕方にはだいぶ間があつた。帰つていないと言つと、も

どつて行つたが、今度は私は彼らの後ろ姿を見送つていた。少し行つた角で曲がり、立ち止まつたような気配を感じた。こちらの様子をうかがつているようであつた。

また一時間ほど経つたであろうか。三度目の来訪にまだ帰つたことを告げ、二人がも

長兄が帰つてきた。年輩の方の男がポケットから何かを出し、

長兄に何かを言つたかと思うと、二人連れは強行に家の中に入つてしまつた。しばらく押し問答があり、彼らは二階へ上がるの

はあきらめたが、一階の押し入れを開けて物色はじめた。

|――一九五八年 小学校六年

當時私は知らされていなかつたが、既に権力の手入れの近いことが予測されていた。

この日 初めて知つた。

正しいもの、平和を愛するものを抑えつける警察権力の姿を、みじんも感じられない目であつた。

當時私は知らされていなかつたが、既に権力の手入れの近いことが予測されていた。戰前抵抗の教員（①教材を再編成し、子どもたちに学力をつける②映画を使って、もの見方・考え方を培う③子どもの主体性を基本にした集団的組織的生活指導）を実践していた父は、特高警察に家宅捜査され、大切な蔵書をたくさん取られ、くやしい思いをしていました。その教訓からこの時、大切な書類等は親しい家に預つてもらつていたので被害は少なかつた。

（「京都子どもを守る会 50年のあゆみ」より転載）

ギツネの目や。

それは幼いころから私が抱いていたおまわりさんのイメージとは全く異なる、人間らしさの

群萌の建国

—日本国憲法のプラス改憲に向かって—

児玉 晓洋

銃を持たない民主主義の国に

私は 一人の日本国の人民
として

私は、一〇〇四年の「崇信」
五月号において、現代日本社会
に起ころる様々な出来事の

根底に、「あなたは、日本国を
どんな国にしたいのか?」とい

う問い合わせがあることを感知し、
その問い合わせに応答して、次の
ように記しています。

私自身が①念佛者、②日本人、
③人類の一員という三つの限定
を持って現実に生きているとい
う事に即して、この問い合わせに、三
つの表現をもつて、応答する」と
となります。

①

聖徳太子の一七条憲法の精
神に導かれつつ
日本国が
何よりも平和を大切にする
法度国家であるようにしたい

③

私は、この地球上に住む人類
の一人として
現代世界からの“如何にして
殺し合いの連鎖を断ち切
ることができるか”という
問い合わせに応答しつつ

日本国が
「銃を持った民主主義—
Democracy with a Gun—
ではなく、銃を持たない
民主主義—Isonomy
without a Gun—」の国で

地獄(戦争)と餓鬼(貧困)と
畜生(恐怖)の無い国である

ことを願う

あることを欲する

二〇〇四年の七月一四日、「九
条の会」の発足に当たって東京
で行われた、記念講演会の記録
が、『憲法九条、いまこそ句』
という表題で、DVDとして發
売されました。その中の小田実
氏の発言は、まことに、よく、
私が五月号の中で③として述べ
た「銃を持たない民主主義の国、
と響き合うものでありました。
いま、その声をDVDから文字
にして記すこととします。

た。それを忘れてはいけない。
アメリカの民主主義と自由と
はちがうんです。アメリカの
民主主義はそういうことを教
えていない。われわれは(民
主主義と)平和主義を結合さ
せた。それが平和憲法なので
す。そのシンボルが九条です。
民主主義はただ習ってやるん
じゃなくて、民主主義に平和
主義をくつつけた。それによ
つて日本独自の民主主義がで
きあがつたのです。アメリカ
流の民主主義とちがうもの、
それは貴重だと思うんです。
世界にない民主主義。(傍点
は児玉)

(一九四五年六月一五日お
よび八月一四日の大阪大空襲
という自らの経験を踏まえ、
終戦という事実をどう受けと
るべきかという文脈の中で)
われわれはそれをどういう
ふうに受けとめたかというと、
戦争はしたらいかんのである、
戦争はしたらいかんのである、
子供心に感じました。(否心な
しに。どんな正義を言つたと
ころで、民主主義をもち込ん
だところで、黙りだ。それで、
民主主義と平和主義とを結合
した、日本人は。)

小田実氏の発言にある、「民
主主義に平和主義をくつつけた」
「日本独自の民主主義」という
ことは、私の言う「銃を持たない
民主主義」と共鳴しています。
そのことを確認した上で、私が
特に注目するのは、小田氏が終
戦(敗戦)の事実を受けとめら
れた言葉です。重要であります
ので、それを反復して記すこと
とします。
戦争はしたらいかんのである。
戦争は間違っているのだ。

と、子供心に感じました。否応なしに。
どんな正義を言つたところで、民主主義をもち込んだところで、
(戦争は)駄目だ。
それで
民主主義と平和主義とを結合した、日本人は、「どんな正義を言つたところで、民主主義をもち込んだところで、(戦争は)駄目だ。」という、この最初の断定。このことが大事です。

最近の日本社会の中には、日本国憲法をマイナス改憲して、戦争の出来る普通の国にしようという人たちがおられます。その人たちに向かつて私はたずねたい。あなたたちは、終戦(敗戦)の事実をどのように受け止められているのか?と。一夜の空襲で一〇万人の一般市民が死に、一発の原子弹のその一二〇〇〇度の高熱で、一瞬の中に七万人の人を焼き殺し、その年の末までに合わせて一九万人を死に至らしめた、そのような戦争をもう一度繰り返す、つまりなのですか?と。
戦争は駄目だ

というのは、終戦(敗戦)を事実に即して真直ぐに受けとめた人の最初の断定なのです。それ以前の理由も根拠もありません。とにかく「戦争は駄目だ」なのです。それは「最初の断定」として無条件に前提される事なのです。そこから、すべてが出発点です。

私は、聖徳太子の一七条憲法の最初の断定を憶う。

（崇信）二〇〇四年十一月一日号より転載）

表紙画作者・執筆者紹介

大南 正瑛 おおなみ まさてる 元立命館大学総長。	岩井 忠熊 いわい ただくま 機械工学者。高槻市在住。
大江 真道 おおえ しんどう 日本聖公会歴史研究会会長。	立命館大学名譽教授。 右京区在住。
大木 映子 おおき てるこ 元小学校教員。 大津市北小松在住。	お詫びしながら、まず誤りを訂正したい。
児玉 晓洋 こだまきょうよう 満天星舎。 上京区在住。	（田北）

編集後記

①執筆者紹介欄の「おおえあきら」(誤)を「おおえたけし」(正)、②同氏の所在(欠)を「西京区在住」(補記)、③二頁第二段第一パラグラフ四行目「高さ四メートルの黒の自然石」(誤)を「高さ一、四メートルの黒の自然石」(正)。

大江氏への「同時集中テロ」(某氏の表現)について、編集者の詫びを笑顔で受容頂いたことに心底感謝しながら、一六八号の編集にあたった。

岩井代表の念頭所感で示されているように、今日の危険な状

況をふまえ、「いのち」の原点に立ち、「平和主義と民主主義」のシンボルである憲法九条を深甚論じる原稿を依頼した。老若男女すべてのひとひとりの心に届き広がることを願いつつ。

（田北）

立会員をひろく募っています。年六回(隔月)発行で、会費は三、〇〇〇円です。表紙にある振替口座にお申し込み下さい。

〔事務局〕

〒六〇六一八一〇七
京都市左京区高野東開町
一一一三 第三住宅
三三一三〇一 井手 幸喜

TEL
FAX

〇七五七二二三八二三
三三一三〇一 井手 幸喜

以和為貴……調和と平和とを何よりも貴重な価値として定立し、
いことに究極的関心を置け。